

フランス語の過去分詞と反対格仮説

井口, 容子
広島大学総合科学部専任講師

<https://doi.org/10.15017/9955>

出版情報 : Stella. 13, pp.85-93, 1994-03-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン : published
権利関係 :



フランス語の過去分詞と反対格仮説

井 口 容 子

1. フランス語の過去分詞の用法のうち、本稿で取り上げるのは次のようなものである。

(1) a. *Accablés de la chaleur, ils ne peuvent plus marcher.*

(目黒・徳尾・目黒 1966)

b. *Entourée de livres, elle avait écrit d'innombrables lettres.*

(MAUROIS, 収録朝倉 1955)

(2) *Les roses cueillies le matin sont fanées le soir.*

(朝倉 1955)

(1)は同格形容詞としての用法であり、副詞節によって書きかえられることも多い。(2)は付加形容詞としての用法である。本稿においてはこれらの用法を、助動詞の *avoir* や *être* を伴わない用法ということで、「(過去分詞の) 単独用法」と呼ぶことにする。単独用法の例としては、(1) - (2) のように他動詞から派生された過去分詞のものが多いのであるが、*être* を助動詞としてとる自動詞¹⁾ および一部の本来の代名動詞から派生された過去分詞も用いることができる。

(3) a. *Partis de bonne heure, ils sont arrivés à Paris avant midi.*

b. *Enfin un bras, rien qu'un bras, venu d'un homme courbé sur le sable, se tendit vers lui, chargé de filets.*

(HALÉVY, p. 12)

(4) *des fruits tombés*

(5) *une tour écroulée*

伝統文法においては、(1) - (2) のような例文と (3) - (5) のような例文を同様に扱っていることが多いのであるが、この二つの間には大きな違いがある。まず (1) - (2) においては過去分詞は受動的意味をもつが、(3) - (5) においては能動的意味をもつ²⁾。第二に (3) - (5) のようなタイプの動詞の過去分詞が

これらの用法で用いられる場合には、必ず完了 ([+parfait]) の価値をもつ。朝倉 (1955) は、次の (6 a) は (6 b) のような形で書きかえることが可能であるとする。

(6) a. *Revenus chez eux, ils oublièrent toutes les difficultés du voyage.*

b. *Quand ils étaient revenus …*

受動と能動という、一見相反する価値をもつように思われるこの二つを、共に説明することはできないものか、というのが出発点である。また être を助動詞としてとる自動詞の場合にはこの用法は許容されるが、次のような自動詞の場合には許容されない、という事実も説明されねばならない。

(7) **Travaillé toute la matinée, il dort tout l'après-midi.*

(LEGENDRE 1989 a)

理論的な領域に目をむけると、生成文法や関係文法において、近年「反対格仮説 (hypothèse inaccusative)」が提唱されている。この仮説は過去分詞の問題に関しても非常に深い関わりをもつものであると思われる。

本稿においてはまず GB 理論、関係文法それぞれの枠で書かれた BURZIO (1986), LEGENDRE (1989 a) の分析を紹介し、各々の利点と問題点を指摘する。そして反対格仮説の直観を生かした上で、意味論的な視点をさらに加えることにより、問題を解決することをめざす。

2. BURZIO (1986) は (8) のような過去分詞を含む英語の文は、(9) のような構造をもつものと考える。

(8) A student *accepted* in the program arrived yesterday.

(9) [_{NP}A student [_{sc}PRO_i accepted t_i in the program]] arrived yesterday.

sc は「small clause (小節)」の略であり、BURZIO はこの構文を小節による一種の関係節 (small clause relatives) とみなす。sc の主語の PRO は主要部 (head; この場合は *student*) によって制御 (Control) される。したがってこのような文が文法的なものとなるためには、sc の主語の位置に NP 移動することのできる名詞句が、過去分詞の補部として存在しなくてはならない。(8) の *accepted* のような他動詞派生の過去分詞はこの条件を満たす。これに対して (10) のような反能格動詞 (BURZIO のいう «intransitive») の過去分詞の場合は非文となる。

(10) *A student *applied* to the program arrived yesterday.

ただこの分析だけでは、反対格動詞 (BURZIO のいう «ergative») の過去分詞を含む(11)のような文が英語では非文とされるという事実を説明することができない。

(11) ?* [A student [_{sc}PRO_i arrived t_i yesterday]] was accepted in the program.

BURZIO はこの現象を、動詞から過去分詞を派生する形態的なプロセスに課せられる制約によるものとする。この派生が主語への θ 役割の付与停止をともなうものであることはよく知られているが、これは vacuous なものであってはならない、とするのである。したがって反対格動詞のように、もともと主語に θ 役割を付与しない動詞はこの構文にあらわれないことができない。

BURZIO はこの制約は一般的なものであるとした上で、フランス語やイタリア語で反対格動詞が過去分詞節に用いられるのは、この制約が緩和された有標のケースである、とみなす。イタリア語の例は次のようなものである。

(12) [Un ragazzo [_{sc}PRO_i arrivato t_i poco fa]] conosce Maria.
a guy arrived a while ago knows Maria

BURZIO はこの制約の緩和をひきおこすいわば引き金の役割を果たすのは、助動詞としての être (イタリア語では essere) の選択であるとする。このことは、同じロマンス系の言語でも、完了の助動詞として haber ('avoir') のみをもつスペイン語の場合には、(13) のような文の許容度に関してむしろ英語に近い状況にある、という事実を説明できるという利点がある。

(13) ? Un estudiante recientemente llegado de Francia ...
(A student recently arrived from France ...)

反対格仮説を取り入れたこの BURZIO (1986) の分析は、他動詞・反能格動詞・反対格動詞のいずれの場合も説明することができる。また上述の英語・スペイン語と、フランス語・イタリア語との間の違いも説明できるという利点も持っている。しかしながらこの分析には BURZIO 自身も指摘する、次のような問題点がある。

(14) * [Un ragazzo [_{sc}PRO_i sembrato [_{st}t_i conoscere Maria]]] ha
a guy seemed to know Maria has
telefonato a Giovanni.
telephoned to Giovanni

BURZIO によればイタリア語においては過去分詞派生に課せられる制約が緩和

されるため、反対格動詞のようなもともと主語に θ 役割を与えない動詞も過去分詞節に用いられる。そうであるならば、*sembrare* ('sembler') のような「繰り上げ構文 (raising)」に用いられる動詞の過去分詞を含む (14) も許容されそうなものであるが、実際には非文である。フランス語においても *sembler* を用いた同様の構文は非文とされる。

(15) *Un garçon semblé connaître Marie a téléphoné à Jean.

フランス語の場合だけに限れば、*sembler* は完了の助動詞として *avoir* を選択する動詞である、ということで一応説明はつくかもしれないが、イタリア語に関していえば、*sembrare* の助動詞は *essere* である。この問題に対して BURZIO 自身、一応の説明は与えているが、あまり説得力のあるものとは思われない。

(12), (14) が示すように、反対格動詞と繰り上げ動詞の間にはっきりと相違が認められるということは、過去分詞節の問題を「主語への θ 役割の付与」との関係で説明することには無理があることを示唆するものと思われる。

3. 過去分詞の問題を関係文法の枠で論じたものに LEGENDRE (1989 a) がある。LEGENDRE は過去分詞の単独用法を、Participial Equi, Participial Absolutes, Reduced Relatives の三つのタイプに分類する。そしてそれぞれに対して分布上の条件を設定しているが、これらはいずれも派生のどこかの段階で、直接目的語にあたる「2」を含んでいなければならないとする点、さらに「2-1昇格」(直接目的語→主語)を含むものであるとする点において共通している。これによってフランス語における他動詞・反対格動詞・反能格動詞のいずれの場合も説明できるものとする。

LEGENDRE (1989 a) の分析の問題点としては次のことが指摘できる。生成文法や関係文法ではこのところ、*plaire* や *manquer* のような、経験者を与格で表わすタイプの「心理動詞」を、反対格動詞と同様の構造をもつものとみなす傾向にある (BELLETTI & RIZZI 1986, LEGENDRE 1989 b など)。そうであるならば、これらの動詞の主語はもともと「2」であったということになる。したがってこれらの動詞の過去分詞も単独用法を許容するはずである。しかしながら次の (16), (17) をインフォーマントに尋ねたところ、いずれも「不可」であった。

(16) **Plu* à la plupart des étudiantes, ce costume est adopté comme uniforme du lycée.

(17) **Manqués constamment ces dernières années, les vivres sont très chers dans ce pays.*

これらは LEGENDRE (1989 a) の分析では説明できない。

4. 以上の考察をまとめると、フランス語における過去分詞の単独用法に関して次のように言うことができる。直接他動詞から派生された過去分詞の場合には、ほとんど問題なく単独用法が許容される。これに対して自動詞派生の過去分詞の場合にはいくつかの制約が課せられる。まず、単独用法が許容されるのは反対格動詞の場合のみであり、反能格動詞の場合には許容されない。ただ、この制約だけでは前節で指摘した(16)、(17)のような文の非文法性が説明できない。

本稿では(16)、(17)のような例を次のような形で説明することを提案する。反対格動詞の場合、すべてが過去分詞の単独用法を許容するわけではなく、動詞の意味に基づく制約が存在するのである。「反対格」として分類される動詞には、JACKENDOFF (1990) のいう「Event」の意味構造をもつものと、「State」の意味構造をもつものがあるように思われる。このそれぞれは次のように記述される。

(18) [EventGO ([THING], [PATH])]

(19) [StateBE ([THING], [PLACE])]

「GO」という関数を含む(18)は、何らかの「変化 (changement)」の概念を含むものであると思われる。これに対して(19)は「変化」の概念を含まない。arriver や venir 等は空間的な変化を表わす「Event」であるといえる。mourir は状態的变化を表わす「Event」である。これに対して plaire, manquer 等は「変化」の概念は含まず、「State」であるといえることができる。

反対格動詞で過去分詞の単独用法を許容するのは、「Event」型のもののみである。この制約を設けることによって(16)、(17)のような文を排除することができる。

5. 単独用法の過去分詞は名詞句にかかるものとして解釈される。たとえば(3a)の *partis* は *ils* にかかるし、(4)の *tombés* は *fruits* にかかる。この過去分詞と関係づけられる名詞句は(18)のような形で記述される反対格動詞の場合、GO という関数の第一項、「thème」の意味役割をになうものである、ということができる。この点において、casser, fondre のようなタイプの他動

詞と共通性をもつ。これらの他動詞は対象に変化をひきおこすもので、次のような形で表わされる意味構造をもつ。

(20) *casser*

[_{Event}CAUSE ([THING], [_{Event} GO ([THING], TO [CASSÉ])])]

これらの動詞の目的語は変化を受ける対象であり、*thème* の意味役割をもつ。したがってこれらの動詞の過去分詞が単独用法におかれた場合、関係づけられる名詞句は *thème* であるといえることができる。

本稿で論じてきた反対格動詞の過去分詞は、(20) のような意味構造をもつ他動詞の過去分詞の用法の「拡大」とでもいうべきものなのではないかと思われる。このタイプの他動詞が受動文として用いられた場合、「受動的動作」を表わす解釈と「変化」の結果としての「状態」を表わす解釈の両方が可能である。「Event」型の反対格動詞は、これらの他動詞と意味構造的な共通点をもつがゆえに、この後者の用法を受けいれるのである。

他動詞の過去分詞と、*venir*, *partir* 等の動詞の過去分詞の間の中間的なステータスにあると思われるのが、次のタイプのものである。

(21) *L'arbre cassé pendant la tempête...*

(LEGENRE 1989 a)

(21) は *L'arbre qui a cassé pendant la tempête...* と書きかえることができるものであり、*cassé* は自動詞としての *casser* の過去分詞である。*casser* のように対応する他動詞をもつ、いわゆる「転換動詞」の自動詞は、反対格動詞の一種とみなされるものであり、その意味構造は(18)のような形で表わすことができる。*casser* の場合の意味構造は次のようになる。

(22) [_{Event}GO ([THING], TO [CASSÉ])]

このタイプの動詞が(21)のように単独用法におかれた場合、関係づけられる名詞句は関数 GO の第一項であり、*thème* の役割をになう。このような意味構造をもつものであれば、*casser* のように助動詞として *avoir* をとる動詞でも、過去分詞の単独用法を許容するのである。

6. 自動詞の過去分詞は単独用法におかれた場合、「変化」の結果である「状態」を表わす。この用法の自動詞の過去分詞が、1節で指摘したように必ず「完了」の価値をもつのはこのためである。

このことは次の現象とも関連する。「être + (他動詞の) 過去分詞」という連鎖は二義性をもつことがしばしば指摘される。

(23) a. Les fusées sont installées en cachette

b. Les fusées sont déjà installées

(VIKNER 1985)

VIKNER (1985) は、(23 a) は「動作 (action)」を表わし、能動文としては動詞を現在形においた (24 a) に対応するものであるのに対して、(23 b) は (24 b) で表わされる先行する動作の結果である「状態 (état)」を表わすものであるとする。

(24) a. Quelqu'un installe les fusées

b. Quelqu'un a installé les fusées

VIKNER は動詞を *verbe d'événement* と *verbe de situation* に分け、前者の目的語は *événement* が終結した時点で «nouvel état» にあるとする。そして「être+過去分詞」の連鎖が上記の二義性をもつのは *verbe d'événement* の場合のみであるとする。(25) の *caresser* のような *verbe de situation* の場合には結果的状态の読みはもたない。

(25) Eric est caressé

VIKNER (1985) のいう *verbe d'événement* は、「変化」の概念を含む動詞であるということが出来る。したがって (23 b) にみられる他動詞の過去分詞と、単独用法の自動詞の過去分詞は [+changement], [+parfait] という二つの共通点をもつということが出来る。

7. 以上、過去分詞の単独用法に関して考察してきた。4, 5 節でみたように、自動詞の場合には、この用法を許容するものは意味構造的に厳しい限定をうける。(18) のような構造をもつものしか許容されないのである。

これに対して直接他動詞の場合は、単独用法が許容される条件は、専ら統語的に規定される性格のものであるといえる。直接目的語をとる動詞であれば、意味的な構造がどうであれ許容される。直接目的語が動詞との関係においてなう意味的な役割も問題とはされないのである。そのため LEGENDRE (1989 a) が指摘するように、「3—2 昇格」[例文 (26)] や「Loc—2 昇格」[例文 (27)] を受けるものとされる動詞も用いられる。

(26) *Avertis d'un danger imminent (par les hôtesses), les passagers mirent leur gilets de sauvetage.*

(LEGENDRE 1989 a)

(27) *Habité par une riche famille américaine, le château avait été*

complètement restauré.

(Ibid.)

このことは本稿5節で主張した「拡大」という考え方をとりいれることにより説明できる。直接他動詞の過去分詞の単独用法はより一般的な現象であるということができる。自動詞の場合は、直接他動詞の一部のもの、(20)のような形で記述されるものをモデルとして、これと意味構造的な共通性をもつもののみ、この用法が許容されるのである。

註

- 1) 過去分詞の単独用法を許容する自動詞には、厳密にはêtreを助動詞としてとるものだけでなく、avoirをとるものもある。この点に関しては、本稿5節を参照されたい。
- 2) 単独用法において能動的な意味をもつ過去分詞には、この他に絶対用法で用いられた他動詞の過去分詞もある。
 - i) un homme réfléchi
 - ii) un homme osé

(以上 GREVISSE 1975)

このタイプのものは、IGUCHI (1986) において示したように、本稿で扱うタイプの過去分詞とは性質の異なるものであり、区別して考えるべきものである。したがって以下の考察においてはこのタイプのものは除外する。

参 考 文 献

- 朝倉季雄 (1955): 『フランス文法事典』, 白水社。
- BELLETTI, A. & RIZZI, L. (1986): «Psych-verbs and Th-theory», *Lexicon project working papers* 13, Cambridge, Mass., Center for Cognitive Science MIT.
- BURZIO, L. (1986): *Italian Syntax*, Reidel, Dordrecht.
- GREVISSE, M. (1975): *Le Bon usage*, dixième édition revue, Duculot, Gembloux.
- IGUCHI, Y. (1986): «Sur l'emploi actif du participe passé», *Études de langue et littérature françaises de l'Université du Kyushu* 4.
- JACKENDOFF, R. (1990): *Semantic Structures*, The MIT Press, Cambridge, Mass.
- LEGENDRE, G. (1989 a): «Unaccusativity in French», *Lingua* 79.
- LEGENDRE, G. (1989 b): «Inversion with Certain French Experiencer Verbs», *Language* 65.

目黒三郎・徳尾俊彦・目黒士門 (1966) : 『新フランス広文典』, 白水社.

VIKNER, C. (1985) : «L'Aspect comme modificateur du mode d'action : à propos de la construction être + participe passé», *Langue française* 67.

〔文学作品からの引用〕

HALÉVY, D., *L'enfant et l'étoile*, 第三書房, 1985.